

(訳 児相被害を撲滅する会)

ブランデンブルク州の児童養護施設

2013年6月15日

『ターゲスツァイトウング(Die Tageszeitung)』の記事。この新聞は、緑の党と近い立場にある—L. クラップマン

## ヴァルトラントでの恐怖

国家は、子供および若者たちを、ハーゼンブルク社が経営している児童養護施設に送致している。そこでは、残忍な教練が支配している。当局は、その虐待について知っている。

ハーゼンブルク有限責任会社

児童養護施設 バーベンベルクの家 Haus Babenberg

シュヴィーローホゼー Schwielochsee、アム バーベンベルク 9 番地。

### ハーゼンブルク社

企業: ハーゼンブルク有限責任会社(Haasenburg GmbH)は、営利目的の会社で、ドイツ、ブランデンブルク州の子供および若者のための閉鎖的な養護施設を含む 5 施設を運営している。この企業は市場のリーダーで、2013年2月13日付ブランデンブルク州少年局の情報によると、56 の収容定員をもつ。この定員について、有期の自由剥奪権をもつ手段の採用を認可されており、それによって、高い収容単価(Tagessätze)を得ている。この企業は、総計定員 114 の養護施設を擁している。過去 10 年間で、閉鎖的な児童養護施設の定員数はドイツ全体で 2 倍以上となっており、現在、国家は、389 の児童を収容している。

基本: 未成年者の閉じられた養護施設への収容は、いわゆる自己または第三者による危険が起こった時に可能となる。家庭裁判所の決定が必要である。ハンブルクのある社会民主党(SPD)上院議員は、ハーゼンブルク社が、他の施設が収容したがるらない児童を収容している、と述べる。ハンブルクは、4年前まで、自分で閉鎖的養護施設を運用してきた。

#### 記録:

2008年11月3日、ヴァルトラントの家において、施設教育員(Erzieher)は、17歳のハンナに対し、「反攻撃対策」(Anti-Aggressionsmaßnahme)を始める。

19:30: 食事の供与および投薬の拒否。

20:05: 自ら抵抗した。頭部を固定された。

20:07: 抵抗を続けた。ハンナは、指でむしろうとしたので、両方の手を縛り付けられた。頭は緊縛されたまま。

20:10: 自身をこすって傷つけようとして、首輪をはずす。ハンナは、大きな音で頭をベッドの台に叩き始めた。

20:27: 手を固定から解放しようとし、施設教育員は、さらに頭を緊縛し続けた。

20:39: ハンナは、頭を激しく前後に動かした。施設教育員は、再び頭を緊縛した。

20:47: 頭をデッキに強く打ち付けた。施設教育員は、再び頭を緊縛した。

21:25: 部屋の真ん中で、彼女が腕組みをして居座った。

21:28: 話し合いの機会の提供。彼女は、この申し出を無視した。

21:33: 再び指をむしった。施設教育員は、止めるよう指示した。

21:50: 施設教育員。彼女は、自分の背中の後ろで手を組むようさせられた。

21:54: 緊縛させられた。床を、足の先端でたたいた。

記録は、事態の進展をおって、朝1時まで続いている。このように取扱った理由として、「引き起された状況」の表題の下で、「指示に従わず、自分で勝手に廊下に行こうとした」と指摘されている。

ハーゼンブルク社の施設は、ブランデンブルク州東部のイエッセルン(Jessern)という集落にあるシュヴィーロー湖周辺の森にある。6月の陽光が注いでいる時には、静かなリゾート地のように見える。そして、ここで写真を撮っていると、筋肉質の男がやって来て、ここで何をしているのか、と尋ねられる場合がある。

閉鎖的な3つの施設と、2つの別館がハーゼンブルク有限責任会社のもので、そのホームページは、「何はさておき刺激の少ない環境での治療的な仕事」について、語っている。

ハンナに起こったことは、このコンセプトの一部であった。『ターゲスツァイトウング』紙に提供された何千ページにわたる内部文書は、ハーゼンブルク社の壁の背後への洞察力を与えてくれる。そこから明らかなのは：反攻撃手段の記録が、個人の過剰反応も逸脱も全く示していない、ということだ。

ハーゼンブルク有限責任会社は、閉鎖的な児童養護施設の経営で国家から何百万も収取している企業である。国家は、しばしば破綻した家族から分離された子供および若者達のための責任を、この養護施設に委任している。苦情が提出され、また州の少年局が、虐待が生じたため2010年に義務を強化したにも拘らず、ブランデンブルク州の側での統制は表面的なものでしかなかった。

### 反攻撃対策

該当する子供および若者達はしばしば実名で当局に知られている – この児童たちは、重症とみなされ、厄介な出来事とそれによる訴えをつくりだす。ハーゼンブルク社は、このような状況をひとつのビジネスモデルにした。

AA対策は、この企業において、しばしば骨折を引き起こすようなきわめて残酷なやりかたで行われた。ある女子によれば、次のようである：「反攻撃対策がとられた。彼女自身が、それを激しく防ごうとしたので、彼女の腕を折った：彼女は、途方もない力を作り出せる」。AAは、反攻撃の略である。

### ドイツ民法 1631 条 b が取り上げられるようになるまで

男子と女子は、通常、12 と 16 歳の間にある。児童の多くは、アルコール、失業、または性的虐待が日常生活の一部とされていた家族から来る。だがそれは、過度の要求につながる離婚のドラマかもしれないし、それが子供の自由の剥奪を規定したドイツ民法 1631 条 b の適用に及ぶ。これは、家庭裁判所によって承認されなければならない。「収容は、子の利益、とりわけ著しい自己ないし他者からの危険を回避することが必要で、かつ、他の方法、また他の公共的援助で回避できないときに許容される」。

過去 10 年間に、そのようにして分離された子供の数は全国で倍加した - 389 人である。

スベニアは、そのような児童の一人だった。彼女の祖母は、スベニアの母親が子供を殴打するので、スベニアの母親を通告した。7 歳で彼女は男性の性的虐待を受けていた--それで彼女は、玩具と金を得ていた。彼女が 2 歳の頃から、児童福祉事務所 (Jugendamt) は彼女の事案を知っていた。8 歳の時、彼女はシュヴェート小児病院に行くよう指示された。診断: 多動症候群。そわそわする人としても知られている。

スベニアは、定期的に、外来で少年援護機関の世話を受けており、教育援助のための特別支援学校、療育の家へと転じていった。そしてシュヴェートの集中的な社会治療グループから逃げ出して、その後ユリエンヴァルデの同じグループに移った。そしてそこから逃れ、路上生活し、薬物・アルコール・大麻を用いた。カネを得るため売春した。彼女は、女子の閉鎖された収容所にたどり着くが、そこから再び逃げて、ときおり精神病院の病舎に再三入っていた。

### 「精神病院よりも酷い」

その後、彼女はシュプレーヴァルト (Spreewald) の施設に連れて行かれた。「ハーゼンブルクのようなことは、精神病院でも経験したことがない」、と彼女は言う。その後、彼女

はそこから出て、連邦政府家族省に告訴し、州の少年局と話しあいをした—それでも、何も変わらなかった。

ハーゼンブルク社 Haasenburg 社に来る者は誰でも、「独立国」に入るのだ、とスベニアは言う。彼女は、到着すると、トランシーバーを持った施設職員の人垣を歩いて行かなければならなかった。着衣を脱がされ、ボディチェックされた。靴の放棄。木靴を渡された。ハーゼンブルク社のジャージを渡された。スベニアは、部屋に連れて行かれた。がらんとした設備。赤段階の統制(Phase rot)。

他の統制段階には: 黄色と緑があり、順に統制が弱くなる。あるときには、他の収容者となしは部外者との「[施設職員に]伴われぬ」接触が、特定の規則に従って許可されることもある。赤段階の統制は、しかし、時に何週間も、あるいは何ヶ月も続くことがある。

いろいろな収容者たちは、赤段階の統制のとき、マットレスとテーブルがあるだけの部屋に拘禁されると話している。『ターゲスツァイトウング』によれば、その部屋に収容者は、目張りをされた窓で閉じ込められる。

15 歳の少年は、世話人たちがこの初期段階を「消毒」と呼んでいる、と報告する。部屋には、ハーゼンブルク有限責任会社の施設規則が書き込まれているはずだ。

抜粋:「6. 私は、距離を保ち、身体的接触をとりません! 7. 若者たちが列に並んでいる場合、口を閉じ、視線を前方に向けます。前の人との間隔は、腕の長さとしします! 8. 若者たちは、施設教育員から言われてはじめて、言われたところまでだけ行きます! 9. 若い人たちは常に施設教育員の右横を歩きます! 10. サービス時間のあいだは、口を閉じています。」

州少年局によると、これらの施設規則は、2010 年以来もはや使用されていないという。しかし、『ターゲスツァイトウング』は、ある少年が、2012 年にこれを書き写さなければならなかった事案を認識している。

### 「施設教育員との空間距離」

新入所者の取扱については、「新規入所者フォルダー」という内部文書があつて、すべてが公式に規制されている。

ハーゼンブルク有限責任会社事務所への問い合わせは、ハンブルクの代理店が対応している。マーケティングとPRのディレクターは、ハインリッヒ・ベルンツェン(Hinrich Bernzen)である、2013年2月28日、彼は、ハーゼンブルク社の立場を表明した:「『新規入所者フォルダー』は、この形式においても、あるいは他の形式においても、用いられていません」。これに対応する記録は「徹底的に問い合わせたにも拘わらず、確認できませんでした」。

『ターゲスツァイトウング』が収集した日付のない文書は、「新規入所者段階 1」として、「完全なる隷属(3 ~ 10 日)」:「対策についてのいかなる議論もしない」、「施設教育員の部屋に入るときの空間的な間隔(すなわちすぐに立ち上がって机のそばに立つ)」;「毎日裸にして全身検索」;「『便所には、2人に伴われてのみ』許可される」;「誤った行動を取ったときは直ちに厳しい姿勢で介入し、厳格な手段をとる(反攻撃対策 = 当初は拘禁、その後、AA室、そしていずれ緊縛する)」。

### 頭部と大腿部をベルトで緊縛

ハーゼンブルク社のマーケティング担当者は、その後この文書について、「施設の女性ないし男性職員に尋ねて、概念的な考察を推測しようとしたところから来たものではないでしょうか」、すべて「我々の日常業務に取り入れられているものではありません」と述べている。

元職員は『ターゲスツァイトウング』に、この取扱要領を日常的に使っていたと言っている。2006年11月9日のハーゼンブルク社の内部チーム会議の記録は既に、「まず新規入所者をAA室に導き入れ、裸にして全身検索を行う…(その後、新規入所者ファイルを参照)」と述べている。AAとは、反攻撃をいう。

その後も、さらに議事録のフォルダーが次々と出現する。『ターゲスツァイトウング』が集めたハーゼンブルク社の1ダースもの内部文書の中には、いわゆる存在しないとされたフォルダーへの言及がある。

この企業の反攻撃部屋では、緊縛ベルトが使用されていた。2009年10月の記録:「頭部と大腿部を緊縛する新しいベルトが注文された」。

児童は寝せて緊縛され、紐で縛られる。ブレーメンの心理学者によると、そのように横たえることには、精神病院であつてすら非常に疑問があり、子供にとってはほとんど全く合理性がない。ハーゼンブルク社は、施設であり、精神病院ではない。

ヒンリッヒ・ベルンツェンは、寝せて緊縛したことについて述べる:「小児・青年精神科医療施設との協力体制改善の過程、ならびにブランデンブルク州少年局との品質に関わる対話において、過去に手順が作り出され、学際的な協働、とりわけ少年への支援と医学との間のインターフェイスが改良されました」。それゆえ今は、寝せて緊縛することはもはや必要ではなくなった、という。

「しかもその主張は、正しくない」

事実としては、州少年局から要件がだされている。『ターゲスツァイトウング』が収集している協定によれば、2010年1月1日から「固定ベッドにストラップで緊縛することは、許されない」と規定されている。今後、個人の「新規入所にあたっての個人的所有物や身体の定期的なチェック」が禁止されている。

ヤンの「教育」も、緊縛ベッドの上でなされていたに違いないだろう。彼は、数日間短時間の間隔をあけたのみで緊縛されていたと主張している。『ターゲスツァイトウング』に対し、これ以上ハーゼンブルク社の児童たちについて詳しく述べようとしないヒンリッヒ・ベルンツェンは、2013年3月に、「しかもその主張は、正しくありません」と書いてきた。

概要と教育モデルについて詳しいある心理学者は、これは、明らかに少年を蹂躪しているこの施設の問題だと言っている。ある文書では、動作の「抹殺」について語られている:「積極的な強さを示す者から積極的に強調された行動様式を抹殺すれば、今後あまりこのような行動はみられなくなります」。「批判されたとき、不同意だったり大声で笑ったりすること」だけで、「不当な行動」とされる。また、「罰」も、「抹消」のひとつである。ここでは「体罰も…考えられます」とされている。ハーゼンブルク有限責任会社は、「行動の構築」もコントロールしている。

それぞれの児童について、望ましい行動、望ましくない行動が記録される。

### 「ポイントを失うと、ベッドにぬいぐるみはない」

望ましい行動をとると、通常1日1ポイントが獲得できる[のちに、1日に複数ポイント獲得できる場合もあることがわかり、記事が訂正された]。望ましくない行動をとると、すべてのポイントが取り上げられる-「悪い姿勢が原因」といったことのように。

児童ははじめ、自分の衣類を持ち込むことは許されていないが、ポイントシステムに従って、獲得したポイントを使って、衣類を買うことができる。「(陰部)のみ剃毛」は7ポイント、つまり少なくとも7日間規則に違反してはならない。他の所で、「ポイントを失えば、ベッドにぬいぐるみはありません」とある。

すべての日常生活について、ポイントを獲得する必要がある: 母親への電話、化粧、部屋にポスターを貼ること。すべてはいつでも撤回されうる。

### 時には、自分も職人や警備員に

児童の身体的な「物理的な緊縛」にあたっては、通常、トランシーバーを持った3~4人の職員が児童を連れてきて、その児童を固定する。その1人は脚を交差させ、お尻にそれを押しつける。別の者が各腕をとりあげて、折り返し、必要なときには、手に留め金を装着し、手首を折り返す。さらに別の者は、舌のかみ切りを防ぐために、頭を脇で抑えつける。このように手枷を自分ではめることをした元職員は、こう説明する。



こう緊縛するのだ、と児童を標準的な手順で扱っている施設教育員は話す。そうすれば、落ち着くことがあるのだという。内部文書はいう：「AA室が使われるときは—誰が何(脚、腕、頭)を扱うか、統制し打ち合わせておきます」。

2009年10月には、ある少年が、5時間にわたり反攻撃の部屋で「教育」された。記録はいう：「泣き、痛さを訴え、解放するよう懇願し、その望みが叶えられないとなるといつも緊張していました。部屋の中を動こうとし、手の留め金が再びいくらか締めつけられました」。

マーケティング専門家ヘンリッヒ・ベルンツェンは主張する：「用語『手の留め金』という概念は、専門用語ではないので、ハーゼンブルクでは使っておりません」。さらに、「痛みを誰かに意図的に引き起こすような手枷」のようなものはない、と言う。

ベルンツェンは、引用された記録を無視している。内部文書には、すでに強い反論と威嚇的な態度をとった時には「身体を制約する」と出ている。また、2010年の文書には、次のように載っている：「留め金は、対策中に適切に装着されていないことがしばしばあります」。

各児童のためハーゼンブルク社が準備している説明書には、「薬物療法」という見出しがある：この児童の大部分について、向精神薬や抗精神病薬が記載されている。抜き書きすると：オランツイピン、ミラツァピン、リスペリドン、アデロール、ニューロシル、セロクエル、ジプレキサ、トパマックス、タキシラン、ディピペロン、ピパンペロン、トルクサル。

### 危険な薬

薬の投与は、心理学者によると重大な副作用があり、子供や少年がおかれている発達段階を不可逆的に脅かす。

しかも、処方するためには、医師は重大な精神疾患を診断している必要がある。しかしそのためには、精神病院に児童を収容する必要がある。このことにつきハーゼンブルク社の PR コンサルタントは:「ハーゼンブルクは精神科の施設ではない」と述べている。

この企業は、長年、ある地元の児童精神科医と連携している。この連携は、儲かるであろう。ハンナは、薬を飲むことを拒否したため、しばしば受診させられた。記録によると、2009 年 2 月:「ハンナは薬を自分でのもうとしないので、施設教育員は、経口薬を注射により投与するため緊縛されます」。この夜、手続きは午前 1 時 05 分まで続いた。

薬の適正な取扱が、すべての職員に知られているわけではない。2010 年 1 月のコンサルティングチームの打ち合わせの際、次のように警告されている:「他の決定が必要であるから、強制的に投与する必要はありません」。

ハーゼンブルク社は、その職員を、神経質に取り扱ってはいない。サービスは人員不足、職員は常に病気と限界にあり、民間の警備会社から黒い服を着た男性が既に毎月使用されていた。この施設で、児童は、警備員や職人に委任されている。

何人かの職員は、職務と私的なことを混同している。ハーゼンブルク社の 5 人の女子職員は、インターネットフォーラムで 2011 年 8 月にこう会話している: 1 人が、あなたの電話会社は通話を保留している間に電話を切ってしまうと苦情を述べる。「助けてあげるわ。私たちは、下肢のために 3 人目がいれば、それでいいのよ:)」と 1 人目が答える。「私がするわ」と、他の職員が書き込む。「私も協力するわ:)。なぜって、あなたは会話のリードを取ることが出来るでしょ」と 4 人目が提案する。「そうそう、私が喜んでするわ\* 破碎音 \*:)」。「頭はまだ空いているわよ:)」と 1 人が割り込んでくる。「わあ、彼/彼女/それが、カーペットの上で怖がってるならね」。

## オーナーの名前は、クリスチャン・ディーツ

ハーゼンブルク社のオーナーは、クリスチャン・ディーツという。持株会社を立ち上げ、彼は商業登記に、パートナーとして彼の妻と一緒に登録している。ディーツは、15 歳若い妻の名前を取ったもので、それ以前はクリスチャン・ハーゼと名乗って、リュッベン Lübben の旧州立診療所の児童・少年精神病院で働いていた。

クリスチャン・ディーツは、「航空サービス」の会社を所有し、ベルリンでフィットネスクラブを経営し、メクレンブルク・フォアポンメルン州には農場を持っている。ハーゼンブルク社の経営で、彼は何百万もの利益を得ている。それは、少年局に送ったものと『ターゲットサイトウング』が収集したものの、3つの計算から明らかである: 300.28 ユーロ [3.94 万円]が日当としてかかり、その上に、学校推進費に 25 ユーロと「身体についての意識」に 17 ユーロが加わる。これらは年間で、子供一人当たり 123,220.80 ユーロ [1,618 万円]となる。

通常、56 人の児童が、閉鎖的な施設に 1 年以上、そしてかなりの児童が数年間、預かられている。調査会社クレジットリフォームによると、合計 114 の定員があり、114 人の職員が従事している[のちに、この企業からの申告で、職員数を新聞社は 220 人に訂正した]。

## 妊娠した女性でもやる

ハーゼンブルク有限責任会社では、反攻撃対策は、たとえ妊娠した女子も対象となる。このことは、2009 年 2 月の、妊娠中のニーナの記録にみられる:「引き金となった状況:『グループイベント』への積極的な参加に拒否の態度」。30 分後:「9:53 ニーナは抵抗し、ひっくり返って膝をつく」。そして「10:00 子供を守るため、仰臥位で床の上に身体を緊縛」。分娩の際の緊急計画がある。

生まれたばかりの赤ちゃんもまた、ここで育つ必要がある。2008 年 1 月、巡回チームは助言する:「ユリアの木靴についての問題: 出産後、彼女は私物の靴で動けると証明できるので、それを履いてもよいこととします。しかし、それによって彼女が、脱出しよう

と考えたときは...すぐにチームとそのことについて協議されるべきで、彼女が再び木靴を着用しなければならないかどうか決定します」。

彼女の母性は、身体的懲戒から保護されない。16歳の彼女の出産からちょうど 2 週間半を経過した 2008 年 2 月 21 日ごろ、彼女は再びハーゼンブルク社にもどり、言われた:「境界をはっきりする必要があります。母という特別な地位はありません。これをときおり忘れていているようです」。

『ターゲスツァイトウング』は、州少年局に、ハーゼンブルク有限責任会社に対し複数の苦情が寄せられていることを知っている。児童の保護は、なぜ拒絶されているのか。

この企業は、内部統制委員会を採用している。クリスティアン・ベルンツェン教授が、2012 年 12 月初旬まで会長を務めていた。ベルンツェンは、ハンブルク上級裁判所の「ベルンツェン日曜日弁護士税アドバイザー」のパートナーである。そうはいつでも、社会民主党が、ハーゼンブルク社だけでなく、外観上の企業の弁護士も同時にコントロールしている。社会民主党は、養護原則の交渉において決定権がある。

#### 少年が不満を言うだけではない

『ターゲスツァイトウング』の問い合わせに対し彼は、その 2 つの領域は「厳密に区切られている」と強調したが、統制委員会の会長を「書面をもって本日限りで辞任した」。児童福祉法の弁護士が、ハンブルク社会民主党幹部の会計係の地位にいる。彼はまた、ハーゼンブルク社のマーケティング担当者であるヒンリッヒ・ベルンツェンの兄弟である。

固有の監督官庁は、州少年局である。省報道官のシュテファン・ブライディングは、監督者として答えてこう言う。少年もハーゼンブルク社の職員も、「州少年局と彼らの観察...について話そうとしないことを」後悔している。

これは正しくない。『ターゲスツァイトウング』の情報によると、当局に苦情を言ったのは、児童たちだけではない。内部のメールのやりとりから、ハーゼンブルク社に長年つとめた職員が 2010 年 2 月に、秘密で、当時の主任に請願している。彼は、「重大な虐

待」を発見したという。これは、ハーゼンブルク社に、何の結果ももたらさなかった。

### 州少年局における矛盾

州少年局は、省と矛盾している。局長のカルステン・フリーデルは、2012年12月になってすら：「ハーゼンブルクのように、同僚がそんなに頻繁に臨場するような施設はありません。[事前]通告はしていません」。しかし、省の情報によると、抜き打ちチェックは2010年の1回だけしかなかった。なぜなら、子供や少年の邪魔にならないように、「見知らぬ人が通告しないで侵入することは、最小限に限られるべき」だそうだからである。

ハーゼンブルク有限責任会社のマーケティング担当者、ヒンリッヒ・ブレンツェンは、「監督権限をもつ当局は「いつでも検査する権利」がある、と強調する。これは、『ターゲスツァイトウング』記者には適用されない：「残念ながら、『ターゲスツァイトウング』がハーゼンブルク施設を」訪問するの「は不可能」だ、と2013年2月に言われている。なぜなら少年達は「何よりも、守られた雰囲気と、圧力をできる限り少なくすることが必要」だからだ。

なによりもこの企業には、世間に知られたくない何かがある：「反攻撃対策について、外部の誰にも話してはいけません」と、2008年11月に、あるコンサルティングチームが言ったという。

2013年6月、『ターゲスツァイトウング』の新たな質問に、ブランデンブルク州の省は、ほとんど愚痴をこぼすような感じで答えた：州少年局は、「すべての告発を調査するよう、何度も繰り返し申し出ています」。

『ターゲスツァイトウング』は、これまでに、9人のハーゼンブルクにいた児童と話をすることに成功した。この児童たちは全て、ハーゼンブルクでの生活は、人生の最悪の時間だったし、その結果に今日なお苦しめられていると言う。児童たちは口を揃えて、この家は閉鎖されるべきだと要求した。ハーゼンブルクで教育された少女は、『ターゲスツァイトウング』に、5人の施設教育員が、16歳になったばかりのティーンエイジャーをどのように

して--「警察の取扱い方」で懲戒したかについて説明した。彼は、空気を吸えないので叫び声を上げ、そのあと頭の上にかき傷を負った。少女は、彼女自身も激昂したという。はじめのうち、彼女は、何かをしたい場合、自分の部屋の真ん中にいなければならなかった。そして彼女は、ドア枠をノックし、彼女の名前を呼ぶ必要がある。

「私は、窓の外を見られませんでした。施設教育員は、それは連絡を受けようとする試みだろうと述べました。私は、二度と家に再び戻してはくれないだろうと思いました」と少女は言う。

#### 「彼女は自分の膝パッドを着けていた」

ハーゼンブルク有限責任会社がレナについて語った事情も、おそらく信頼しているものだろう。ある少女が、14歳でこの企業に連れてこられ、とりわけて苦しまなければならなかった、というのも、彼女は常に、頭部防護ヘルメット、そして膝と肘にパッドの着用を強要されたからである。少女は、それで眠らなければならなかった。

表向き、それは自分自身を保護するための教育的措置とかかわるものだった。ある心理学者は、それが、精神的障害とてんかんを持つ児童には、「身体の直接的認識への非常に極端な介入であり、憲法上の権利への違反に等しい」と考えている。

レナは、何時間も続き残忍な反攻撃対策からも、また命令された膝曲げから逃れることはできなかった。彼女のヘルメットも同様であった。「彼女は、膝と肘に膝パッドを着け、ヘルメットは、彼女の脚に置かれていました」。2008年5月31日、職員は、出来事に関し彼の意見を書き込んでいる。この日、レナは死んだ。

(登場する児童は、すべて仮名にしてある)

2015年2月17日 ポツダム発（ドイツ通信） |

ブランデンブルク州教育省は、営業許可取消に対するハーゼンブルクの児童養護施設からの異議申立を却下した。問い合わせに対し、同省の広報担当官は月曜日に、そこに収容された若者に適用されていた処置は、児童の福祉を損なうものであったと指摘した。

管轄当局は、2013年12月に、ハーゼンブルク有限責任会社に対し、虐待を理由として営業許可を取り消していた。

ドイツ全土の少年局が、ブランデンブルク州にある同社の3つの児童養護施設に、児童と少年を送り込んでいた。コットブス（Cottbus）の検察庁は、ネグレクトや暴行という虐待について、施設教育員ならびに事業者に対する50以上の訴訟事案を調査している。

ベルリン・ブランデンブルクの高等行政裁判所は、手続きの迅速化に関する同省の決定を確認した。だがこれに対しては、異議が申立てられた。ハーゼンブルク有限責任会社は、現在提起している異議申立についての決定が出たあと、引き続き裁判所に、児童養護施設の閉鎖に対抗する処置をとることができる。

## 【この記事に対する当会からのコメント】

この戦慄する児童養護施設内虐待事件は、ベルリンに本拠を置き記者・編集者の自主管理で経営されている新聞『ターゲスツァイトゥング』で大々的に暴露されたものである。しかし、その重大さにも拘わらず、この事件は、当会の知る限り、これまで全く日本に紹介されていないから、ここに、クラブマン教授より提供された記事を全訳して提供することとする。

ネオリベラリズムの進行に伴い、ドイツでは、児童養護施設が民間経営に委ねられるようになり、そこに商機を求めるハーゼンブルク社のような企業が出現している。政府からの委託で児童を引き受けて「措置費」で経営をすすめ、多大の利潤を蓄積するようになった。日本においても、企業でないとはいえ、社会福祉法人も営利追求が認められているから、この構図は、日本と酷似している。

また、「反攻撃対策」に代表される施設内での管理・虐待の手法についてみれば、日本の児童養護施設でこのような児童の身体の物理的緊縛が頻繁になされているかは定かでないものの、閉鎖的環境、窓を見ることや目を合せることが許されない、児童の動きを制約する履物の着用、向精神薬投与などについて、日本の児相収容所（一時保護所）や児童養護施設のやり方と瓜二つとってよい。

この記事は取り上げていないが、このような人権侵害が公然とドイツで行われた背景を考える場合、東ドイツが存在したことを無視できない。ハーゼンブルク社が経営する施設の所在地ブランデンブルク州は旧東独に属し、他の関連事業の経営基盤も、すべて旧東独にある。東独では、旧ソ連同様、反体制派が強制収容所に入れられ管理・抑圧されていたことが知られるが、旧東独崩壊後、その職員やノウハウが、そのまま児童養護施設に受け継がれた疑いがある。このような低い人権意識の遺産を、旧西独地域にある児童関係官庁が、手のかかる児童を処理する手っ取り早い方法として利用していたのではないか。「共産主義の負の遺産」である低い人権意識をこのように歪んだ形で利用していたというべきドイツ当局の児童行政は、全く褒められたものでない。

『ターゲスツァイトゥング』紙は、記者が自ら大量の資料を収集してこの記事を書き、掲載し、その人権侵害を告発した。それを契機として、ハーゼンブルク社の経営する児童養護施設は、全面閉鎖に追い込まれる。この問題処理が、日本とは全く異なる。東京都新宿区にある児相収容所で続いている同様の収容所内虐待をニュース番組で暴露した日テレの報道姿勢は評価されるが、その後その事件を自社で追うことはなかった。東



京都が委嘱した児相収容所の「第三者評価」においてもこの収容所内虐待は全く問題にされず、闇に葬られて収容所はそのまま存続している。ここに、誤りが起こればしっかり正す、ドイツの透徹した人権意識があらわれているというべきであろう。

そのような人権意識を持つドイツのクラップマン教授が、日本の児相を厳しく批判し、国連子どもの権利委員会第3回日本への最終見解に児相問題を盛り込んだ。これは、日本の一部「子ども人権団体」代表者が言うような誤解ではなく、当然の帰結であった。